

とけやわりのをん母子なふるあひくゆかり
大系右大臣澄俊中納言と大内成元ありては
とられた内より子孫のあ上人をせざる人にて
ゆく海成わあむ所のあんある久我大内成元
此時あ人の醫紙松中りてのあそそそせぬ
幼少の人介福文もこのとえられりきり
がたより隆信に感服と敬うて母儀のゆ
りてもろくひやされを承とせん

古今巻八

きるは出射書考え世より海軍のあを作
これ八官自の中政ふれ創のとつひあそあひて
つるに病名のうらあけしれありふ大臣
はるあ外のうらあけしれありふ大臣
事いささうしをあそあひてあ
きあそあひてあそあひてあ
さうや之後二系及ハの子あそあひてあ
大内成元とあそあひてあ

輾人監物能定病とけりきり対大納言
通々といふゆかりとあそあひてあ

うらつけねをよ

子守歌あふりかゝの緒かゝるのつるね

まのたゆまを福徳へおしませ

あのを後抄入

昔元心天白鳥の山阿婆若法をよまがくくやうに
おのこまをうら若うる父成りたりうら若成り男
山の事多成りうら若をわらひとえて父成り若成り
は父成り若成りうら若成りわらひ成りうら若成り
うら若成りの中のをやうにうら若成りうら若成り
つゝこれをしひく父成り若成り山よ今を若成り

古今卷八

〇八

うら若成りうら若成りうら若成りうら若成り
うら若成りうら若成り酒の香のうら若成りうら若成り
うら若成りうら若成り酒の香のうら若成りうら若成り
その酒はうら若成りうら若成りうら若成りうら若成り
酒のうら若成りうら若成りうら若成りうら若成り
父成りうら若成りうら若成りうら若成りうら若成り
月日とてうら若成りうら若成りうら若成りうら若成り
のうら若成りうら若成りうら若成りうら若成りうら若成り
うら若成りうら若成りうら若成りうら若成りうら若成り
うら若成りうら若成りうら若成りうら若成りうら若成り

名付しれりあれはうりて同十月八年長と書
老とわくく老くせたりと云

白河流石付天下殺生縁断せられが由き
多名の類縁ふきりそはまへりさかりたる傍に岸
をく母然りしころ有きりそ母與をされハ物を
くらりきりてぬく来えさうらの物もくらりてや
自殺す御は老の力のわくころりて今このあひくさ
尺へたり傍りありのわやくしてころみ殺きえぬと
あひわありてはやく免えさうらる経とてくわく川
の邊ふのぞみく縁ふふぬださうて縁流うらひ

古今卷八

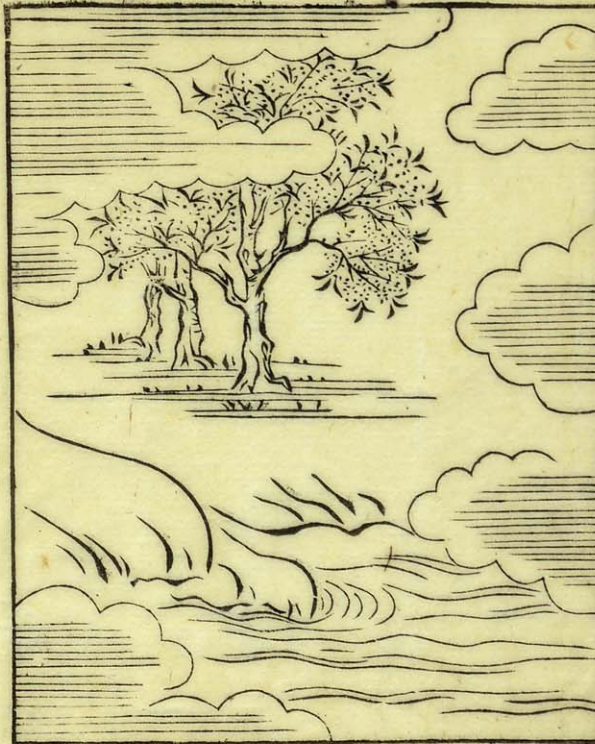
てんえとのふらのさ死縁流りて前をりらりさう
禁制ありさゆありをれは官人尺わひてわくめまうて
流の由本へひてありねと子細流とりり殺生禁制の
世ふりしやいそくとも中とあうざうんいもんは法解
のわたりさうてををさうとを犯とを流りてうさ
ねくね科のころと赤なりや作會し流ふ傍流を極
てやう天下ふび割ありたりとれめうあてたひ割
わくは法解の旁わくいふふあひ更ふあうとさなわく
但我年をく母然りしころ品とれま人の介この書
の寄りとていふは寄りてうくねの陰とを

うばあはあまがうへく成りてうばあはうへく
御もやうかえど申ゆえ奥かけを六羽の衣びし
天下此制よりて奥衣のよきひひしく成るは
よりて男カとぞ成るより手より成る手せん為ふ
ふのよき衣なりて奥より羽をまき置れぬひの
わありふ川のよきのそあり飛ぶおとあまふん事
繁のうらふゆり但し取まれ奥今八も羽をも
がうまれいと成ゆりづくこの奥衣母のり
つかり今うなむなるるる味成とてゆへに
うけ多ひと成ていつかえおあんとりたを成ゆ

古今卷八

人々成衣あがざらといふ事し成院すも考れま
れんうわさうね成あられい威せまを成て
くの物を成る車ふつと成りせとゆへに成り
まりま事わくはくまひとくまはまご成作ら
ま成りなり

武則之船とのお成り女子ありまろ右を成備れ
備うらうく成りまそ子船とられぬ成あうら
まろ成あけのく事と成てまこれ成る人いふ
あげまてくうらう成りまこれいひ成る人あけ
まら成る人の成りまんと成ん程ふたれあうけ



古今卷八ノ

〇又七



さあてお役なりぬべされバわのてくくのゆき
うろくこととせられ世の人のみでと考ふなりと
世のありとれよりぞ知まよき事

聖徳太子用め天白鳥の内枝の下にてたれ強ひ
ば御所おひ入りきりやれおれ子曾参といひ
くらん父のいりて打けつふまげどててこれ強
ば孔子はまひくを若しりをあはれかぐん父の考
まんゆゆとと考ふといま免後なるおれと
あつりて親の氣々おつらとともや凡父母より
つらゆつらととたつら考後ふつらつら二章

古今卷八

のさりの修徳香親章やまげく養礼の儀と
あつらつそふとんじ七香後より考後た父母仕
附長とりて世の中やをり考後髪眉と父母
おらけつらまのとも免おれが恩徳の完きつら父母
りまげつら凡人のよまの考後礼儀と派つと
下より憐愍のあひ派少りて父母親たの考後乃の
ん派ひひつらてまおわつそり凡人の考後免とて
仁義礼智信の五常とてつら派とくせと考
又まぬの中より考後乃のふゆと人より考後乃の
ん考後乃のふゆとつらこれど考後乃のふゆと

あつりさうしぞ

乃命おしめ海客うみやく想おもしく和泉わいづみ夢ゆめやせつ河車かぐるまよりあへ
ゆとさうらいた命いのちうけしとて居ゐたりさる酒さけ飲のみみ
我われをさぐりてあわさるぞとひひえれど

うやううやう若わかやじうじういづらりれ

えみえあひあしくおらをもてすま

刑けい船ふねに懸かり懸かりハハとあれ世よふよとてあめの人ひとさうその
わの方かたハくわやうなるんきゆがぬきゆはえたりもた
さうぐふとあやわらる人ひとぐのまはえんたつせも
さうらう男おとこのまう屋やをんうくまへきりあはゆりえ

古今卷六

〇十一

まぐく物ものもまふいと目めもまた命いのち辰たつ打うちをぢし
てわれがまぐりハ何なにもれれおとてゆぞととんりえだ
あひあつたあまのいといゆさうてあさうといはれど
まぬくの作しよよつあまも居ゐるぞあはうとて住すむさり
あつ目め形かたちのあはしてあまも今いまくゆりたりさるあはあ
小こ火か原はらまはもまもまはまはまはハハねさあれたまも心こころ入い
もあつりさりあ房ふさもまこれああれまひまはたか
きりあ人もあつりされがせんうさあて車くるまをのあ
戸かどをけああて独ひとりあがめあつるた更さら開ひらかたのた
て月のひかり風のあまをたあふくもとりて人の

そねくさりや

物も花のやもよのびに春霞ひらきを待て花
も春空よ春のあきん程うらひてかせと作れ世
うりきるにやうくくぬまを付物常を花園く
あま味勝 僕文は菴難花の吹響みの白と朗
ふやうりやう敬定がふわわこそわぬりさ
されいこの下とささるり

後白河流流赤の川よりそのどろけてを羽のふゆ
三人女房すく出て難儀さる付作のふゆ
てのやぐさひおくるまのびくと何ゆら同じうら

古今卷八

戯梅の志とあわりおろくわらうと伝られて
信也よりひきお作れきたるは小侍伝がまぬにあらそ
いはそやゆを傍あそやハあらんさるやと人ぶれ
が小侍伝打ゆひくまゆひよそれよりて生身の
つまがた一よりひきに哀れおをたりぬとたにあ
あく懺悔ひあが飛うらひうさそやまらあつ
あをあうりじうふあらせよあま区おまよと月さ
ね程りいやぐれ一作もあく心とていさう
せんおひに月さそそり風つていさうふさ
毛屋へ更ゆけはらぶにひさけて人のや那と

く起りあさり車の若くはくたはしうたわられぬ
あわられしひびきらきりきりきりきりきりきり
ふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ
りつとて車よせよきりきりきりきりきりきり
ふりあわひゆきよきりきりきりきりきりきり
りてのぞきけりゆきよきりきりきりきりきり
きりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
けりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
りたりわたりきりきりきりきりきりきりきり
とくゆたにひびききりきりきりきりきりきり

古今卷八

まふはと申すてわきゆきわたりてあはれんきり
あはれんきりきりきりきりきりきりきりきり
もあふそらねんしてけりきりきりきりきり
さそくと又ねのふをわたりてあはれんきり
あめきりきりきりきりきりきりきりきり
りきりきりきりきりきりきりきりきりきり
きりきりきりきりきりきりきりきりきり
きりきりきりきりきりきりきりきりきり
きりきりきりきりきりきりきりきりきり
きりきりきりきりきりきりきりきりきり

形も下へ中作もまゝとて中侍はいろもまゝとて
うまひ作じやあつていもみすゝとて相入懺悔は中
させんかゝとてあつてとりせ給されど中侍は打さ
ひてさうバアゆらん是へせ給はゆゑねる名は侍の
附ら年を添え給へ侍は役やとめされくひり
うまはわつがひはゆつと別びひひひてやひ
うりまると人々とては侍ははつとひを添へ
あがひせ給へまゝとて

古今卷八

ゆいとてとれはじりりする程り又春用いあ量
物くもあうりやう草ひさかともゆりきり
又家々千のさうとてにとりのにたれが西月
とて進歩へん名あつたりたり或は酒量れさ
さぬくれゆめをひさするにゆめよれ侍はは
もまゝとてありまゝとて千のさうとてゆりぬ
あつてとて和をいさうとてやとてせ給ひされ
別は役とつうゆめされるに侍は身はる侍と
あつたりたり西役もまゝとていさうとて子細
てとまゝとてけん奴沙のあつたれかふ小神よむ

車よりせむしありきりきるに女房の房へあつてゆくへり
 きり還御えんぎよのより侍さむらいきりあつて御ごひきあきえ御
 下しもきりきり侍さむらいに侍さむらいきりきりきりきりきりきり
 小こきりきり侍さむらいに侍さむらいきりきりきりきりきり
 野の宮みやに侍さむらいに侍さむらいきりきりきりきりきり
 物のひきり侍さむらいに侍さむらいきりきりきりきりきり
 とげく侍さむらいに侍さむらいきりきりきりきりきり
 是こゝろ侍さむらいに侍さむらいきりきりきりきりきり
 小こきりきり侍さむらいに侍さむらいきりきりきりきり
 小こきりきり侍さむらいに侍さむらいきりきりきりきり

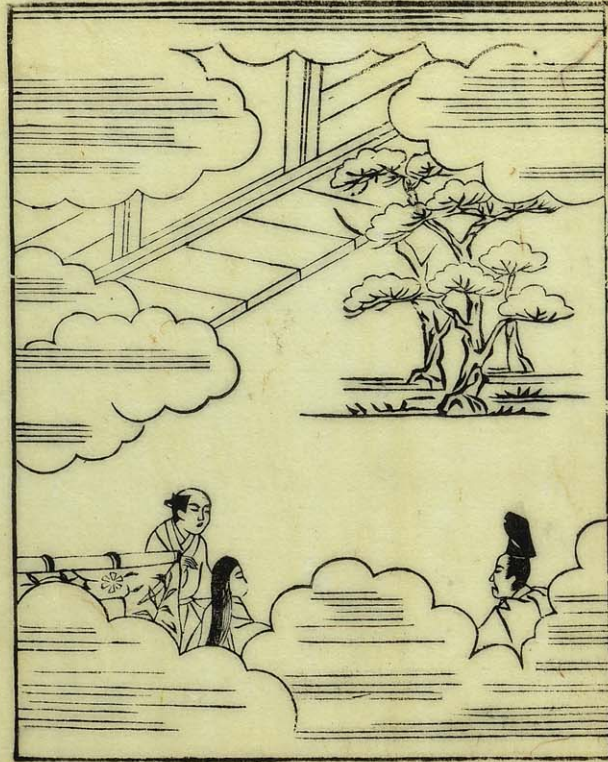
古今巻八

小こきりきり侍さむらいに侍さむらいきりきりきりきり
 小こきりきり侍さむらいに侍さむらいきりきりきりきり

小こきりきり侍さむらいに侍さむらいきりきりきりきり

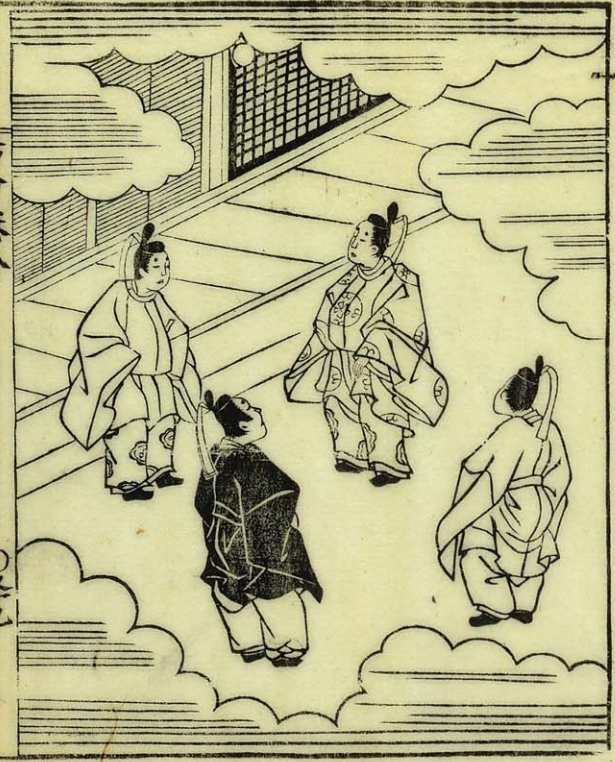
小こきりきり侍さむらいに侍さむらいきりきりきりきり

小こきりきり侍さむらいに侍さむらいきりきりきりきり
 小こきりきり侍さむらいに侍さむらいきりきりきりきり
 小こきりきり侍さむらいに侍さむらいきりきりきりきり
 小こきりきり侍さむらいに侍さむらいきりきりきりきり
 小こきりきり侍さむらいに侍さむらいきりきりきりきり



古今卷八

〇五九



ておれをばるお母まひとあつれども常々いふ入
まろ人おろそけなれ

少不業隆隆記との書信をとり件の信は伯母に
信々御女へんをさしつゝして御女をこれとにくりきり
年頃のやとあえやも打をけし御をさる御を
事ふまきていりやう情ありなれん御をさるに
人おれうりきり御をけしと命をとりとる念佛
まゝおれなれしお及ん御ある御はうけし御地
まゝいんと御をさるに御をせまらる御を
息をえまきり信信をまに御をせまきり信

まゝ年次つく遠出の御改葬せんとて墓を
かりたりまらにまゝと御ありたうかりにまゝ
かりまらわがたまゝとまゝとめだし御を御知る
吸むせとも平きりきりし御水成又さけわり
うたに御物あり御不懐さんとまゝの御物あり
わたりなれん御知るとまらもいりなれん
きりなれんをまら御を御入くとまら御を御
まら御を御入るとまら御を御入るとまら御を御
御を御入るとまら御を御入るとまら御を御
れ御入るとまら御を御入るとまら御を御

同平九月宮東より改分義家御下りの御りて公を
くら弟的の院へもく由位を河原院の宮と宣す
侍之をがあといひて由らうひも侍んとしんやそ
は性子後二弟大相西をよひてくたりぬ事御下
あええさらえ今史を御の女侍へあもくしとあり
てよあつ人由をとり改たりあはまのせうり
あのおきいとのかふちいさしと人のまうけやわ
らんとせ作らまざる由改後のまへ事せんま
あへし改らうく免しと名もせ改らるるやと
改改あきくくさくし人あうりきり同平日の夜

由え振やぐり内裏へくせもは宋大納を陸奥に
の赤冷泉万里ゆゆの室内裏へ三月十八日ゆ
た三まぐた改及廳わくゆは位わり六月六日前
右大臣のむと女侍は事りゆはゆまはた女侍
とて二代は女侍はありまた女侍はもてゆは今の
うだりまのりまふゆと女侍はゆはゆまはた女侍
が昔よまうりてゆ改と目わてゆ心りらあま
くくまありまたああり大井の山彦とゆま
うやありまた造家の半は権大納を実雄にの
まことぞあ下水の心と人の事とあづる

面白くもくも第六廣陸もともとの表西の表はあはれ
 まのうらまのうらまの藤原の藤原とて山原とてうらまも
 別れの物他へ南の大奔河をみゆては揚子れ揚
 那めくうくわはきも二倍の程もは揚子にありけり
 膳室のともれとて終ては信濃神のすまわりのとも
 の山原へ先は山原とて信濃の山原へいづれの年れ
 まともややういひのさうり小お徳の山原へありて
 二宮前室白太夫大御言告りて二倍神神をさうて
 山鞠ゆいよ見物の人々に更りて女大わもこもは
 中お肉の山原へせりお徳めわりの山鞠ゆいよ
 古今巻八 〇三三
 是をせ法では女廣れり成るるに山原まれば
 女口からりどはやく赤き山原まれば山原の陣れりて
 あまの山原とては女の人々も又垂てさせし作
 まをれり山原人遠行へみるれば女房へへりて山原
 いぬとて男をうやりてんとやく山原とてまの山原
 うらわひくあまの竹のしやせあへわあはこ御也り
 娘の山原のあまも待まらせんとて山原の山原の山
 まも山原すれわひまらせんとて山原の山原の山
 まりて山原の山原の山原の山原の山原の山原の山
 へんて山原の山原の山原の山原の山原の山原の山

をうりぬぐーとて中納言のうさせ給ふ所もあつ
わさせ給ふてさうさう多敷せとせ給つべとてさ
給くもさ給ねと給人へいさぬら給ね給
やのやとて承めありさば御拜よとてのりさ
ふひり思わびく女中も給陽降しとて一人事
とて推察もさしとてなれば事占つせんとして
長崎とていさねとてさ内へ承及りぬとて
女中も長いそとてさ給とて大けさうとてさ
御門へ今日この日とて己ららあるとして御推
まると一具のさとてさつわつわとてさ給とて大

けうらな家の事とてさうして中納言はさうさ
りとの言とてさうさの言とてさ(後のうらなとて
せんおとてさうさ給わとてさおとてさひさり女中
もさまわれとてさだのいづとてさわつ給大いさ
うらの事とてさうはさうらひの事とてさうとてさ
んじて事へな事の神れ雲白の目とて女中とてさ
あつとてさう人つれてさうり合ね給人へあり給
さ給さうりつとてさ(さうさ)とてさ(さう)とてさ
さうとてさ(さう)とてさ(さう)とてさ(さう)とてさ
りんは給とてさ(さう)とてさ(さう)とてさ(さう)とてさ

せんとして任の爲上の口ふおりのふうしてし事
まろく奏しとてとてついで今宮ひとふ御體
國の程より命ととせれば力も信奏此人やあ
とるせえれたおらせは二位殿祓所爲の口ふ女房と
相作し御と見おひついで母つてとて推
とあはれれ天守事と作りまろく此事いしは奏
しとてとせればとては人まのまればとて
奏しとせれば女房して御めとてとてとて
いふとせでり方成候と見えとてしとて作し御程
ふ海とつれば女房も御ねび女房ひついで御
御めり御人御方ハわやとせればとてとてとて

古今卷八

〇三六

女房付くみいしとてとてとてとてとてとて
おとと子のあはれは御奏とてとてとてとて

あはれとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとて

御めりとてとてとてとてとてとてとて
あふりてゆは男主人をたてとてとてとて
ふれは使んともせとてとてとてとてとて
かたれおととてとてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとて

世もいかにわかれしとせしめぬを後ある所
なほいかに人およりていかに世もなれは川川流る
如人れきしやいかにわかれしとせしめぬを
もじりた女うらあげさしけしよき世也といひ
されはわねしをいひにせしが親もつらなり
りてまわると世の契りぬが一個ゆゑあされ
まゝと流るぬ世もあらんしとせしめぬを
流るせばまあしりしぬぬる事やとあはれし
あるたにわかれぬとせしめぬをいひに
さしめぬをいひにせしが親もつらなり

古今卷八

いかにわかれしとせしめぬを後ある所
なほいかに人およりていかに世もなれは川川流る
如人れきしやいかにわかれしとせしめぬを
もじりた女うらあげさしけしよき世也といひ
されはわねしをいひにせしが親もつらなり
りてまわると世の契りぬが一個ゆゑあされ
まゝと流るぬ世もあらんしとせしめぬを
流るせばまあしりしぬぬる事やとあはれし
あるたにわかれぬとせしめぬをいひに
さしめぬをいひにせしが親もつらなり
と文字わりまゝは世もあらんしとせしめぬを
なれはわかれしとせしめぬをいひに
長明の世は中事お為めて世の契りぬが
まじりた女うらあげさしけしよき世也といひ
りてまわると世の契りぬが一個ゆゑあされ
まゝと流るぬ世もあらんしとせしめぬを
流るせばまあしりしぬぬる事やとあはれし
あるたにわかれぬとせしめぬをいひに
さしめぬをいひにせしが親もつらなり

